

| | | |
|-----------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| <p>令和元年 5月31日</p> | <h1>病害虫発生予報</h1> <h2>6月号</h2> | <p>茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会</p> |
|-----------------------|-------------------------------|--------------------------------|

令和元年度茨城県農薬危害防止運動が始まります(6/15～9/14)

～薬剤散布時には周囲への飛散防止に努めましょう～

< 目 次 >

| | |
|----------------------------------|---|
| I. 今月の予報 | |
| 【注意すべき病害虫】 | |
| 水稻：縞葉枯病（ヒメトビウンカ） | 1 |
| 【防除所レポート】イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除適期の予測 | 1 |
| 水稻：ニカメイガ | 2 |
| ナシ：黒星病，ナシヒメシンクイ（第二世代幼虫） | 3 |
| 【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測 | 4 |
| 果樹共通：チャバネアオカメムシ | 4 |
| 夏ネギ：ネギハモグリバエ，ネギアザミウマ | 5 |
| 【防除所レポート】ネギハモグリバエの別系統の発生について | 6 |
| 【防除所レポート】小麦の赤かび病の発生状況と今後の対策について | 7 |
| 【その他の病害虫】 | |
| 水稻，ナシ，ブドウ，半促成ピーマン，夏ネギ | 8 |
| II. 今月の気象予報 | 9 |

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>

フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|----------|-----|------------------|
| 平年並～やや早い | 多い | 県西地域, 県南の一部地域 |

[予報の根拠]

- ① 2～3月に採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は、県西地域10地点、県南地域5地点のすべての調査地点において5%以上の高い値である。
(平成31年3月22日発表 病害虫発生予察注意報第5号参照)
- ② 有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛期は、平年並と予測される。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想される。

[防除上注意すべき事項]

- ① 昨年、本病の発生が認められた地域で、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施用してもなお本病の発生が多かった水田や、本年育苗箱施用をしなかった水田等では、ヒメトビウンカを対象とした本田防除を行う。防除適期については下記の防除所レポートを参照する。
- ② 育苗箱施用と本田散布の体系防除を行う場合等は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を選択する。
- ③ 5月下旬に採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫におけるイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率について、今後調査を行い、6月中旬頃に病害虫防除所ホームページに情報を掲載する予定なので参考にする。

防除所レポート [イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除適期の予測]

- ① イネ縞葉枯病対策としてのヒメトビウンカの本田散布の防除適期は、ヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生開始期から増加期（産卵最盛期から1週間後までの間）である。
- ② 5月30日現在、有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛期は平年並と予測される（表）。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想されるため、防除適期が予測より数日早まる可能性がある。

表 水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の予測産卵最盛期及び予測防除適期*

| | アメダス地点 | 古河 | 下館 | 下妻 | つくば | 土浦 |
|---------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 予測産卵最盛期 | 本年 | 6/11 | 6/15 | 6/15 | 6/17 | 6/15 |
| | 平年値 | 6/12 | 6/16 | 6/15 | 6/17 | 6/15 |
| 予測防除適期 | 本年 | 6/11-18 | 6/15-22 | 6/15-22 | 6/17-24 | 6/15-22 |

※産卵最盛期は、今後の気温が平年並に推移した場合の有効積算温度から計算した予測時期（5月30日現在）。
防除適期は、予測した産卵最盛期から7日後までの間。

(水稲 続き)

2. ニカメイガ

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|------|----------|------|
| 平年並 | 平年並～やや多い | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① フェロモントラップへの誘殺時期は、県予察圃（水戸市）、龍ヶ崎市および筑西市で平年並である。
- ② 5月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年よりやや多く、筑西市で平年並～やや多く、県予察圃（水戸市）で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 例年発生が目立つ水田では、6月上旬に第一世代幼虫を対象とした薬剤防除を実施する。



水稲のいもち病の防除について

[現在の状況]

5月下旬現在、調査圃場の置苗での本病の発生は認めていない。

[発生好適条件]

気温 20～25℃で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間濡れるような条件のとき、一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は本病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等適切に処分する。
- ② 常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。
- ③ 本病は例年6月下旬から発生する。粒剤による本田防除の適期は初発前～初発時なので、適期を逃さずに防除する。
- ④ 粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。

※防除所 HP にて6月より BLASTAM（アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム）による葉いもちの感染好適日の出現状況を随時掲載する予定ですのでご参照ください。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|------|-------|------|
| — | やや少ない | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、発病葉率(本年値0%, 平年値0.2%)は平年より低く、発病果率(本年値0.03%, 平年値0.3%)は平年よりやや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 効果的に防除するためには第一次、第二次伝染源の除去が重要であるため、発病した芽基部、葉および果実は見つけ次第除去し、園外に持ち出して土中深く埋める等適切に処分する。
- ② 薬剤散布は、発病部位を除去した後に行うと効果的である。
- ③ 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に行う。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ (第二世代幼虫)

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|----------|----------|------|
| 平年並～やや早い | 平年並～やや多い | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、第一世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から、平年並と予測される。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想される。
- ③ 5月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、かすみがうら市および石岡市で平年よりやや多く、小美玉市、土浦市、笠間市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、第二世代幼虫が発生するため、平成31年版露地赤ナシ無袋栽培病害虫参考防除例を参考に適期防除に努める。防除適期については、次ページの防除所レポートを参照する。
- ② 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に行う。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

防除所レポート [ナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期は、第一世代成虫の誘殺数がピークに達した日の7～9日後である。
- ② 各地点の第一世代成虫の誘殺最盛期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測し、おおむね平年並である。
- ③ 気象情報によると、向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想されるため、防除適期が予測より数日早まる可能性がある。
- ④ 表中のかすみがうら市、土浦市、筑西市(旧下館市)については、今後、病害虫防除所ホームページで誘殺状況を随時更新するので参考にする。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第二世代幼虫の予測防除適期

| 地点 | 第二世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾ | | |
|------------|-----------------------------|---|-------|
| 笠間市 (旧友部町) | 6月24日 | ～ | 6月28日 |
| 笠間市 (旧岩間町) | 6月24日 | ～ | 6月28日 |
| 小美玉市 | 6月21日 | ～ | 6月24日 |
| 石岡市 | 6月17日 | ～ | 6月21日 |
| かすみがうら市 | 6月19日 | ～ | 6月23日 |
| 土浦市 | 6月19日 | ～ | 6月23日 |
| 筑西市(旧下館市) | 6月17日 | ～ | 6月21日 |
| 筑西市(旧関城町) | 6月22日 | ～ | 6月25日 |

1) 予測した第一世代成虫の誘殺ピークの7～9日後とした(5月30日現在)。

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|------|-----|------|
| — | 平年並 | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① 本年2月上旬の越冬量調査における成虫の越冬数(本年値0.2頭, 平年値2.3頭), 越冬地点率(本年値19%, 平年値41%)はともに平年よりやや低い。
- ② 5月下旬現在, 調査圃場のナシ果実において, 被害果を認めず平年並である。
- ③ 5月第4半旬までの予察灯への総誘殺数は, かすみがうら市および笠間市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① カメムシ類に吸汁されたサクラ果実の割合は笠間市泉において5月中旬で100%となっており, 今後, 餌を求めて果樹園へ飛来する可能性があるので注意する。
- ② 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり, 果樹園への飛来が増加するので注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には, 活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ③ 多目的防災網(6mm目または9mmクロス目等)はカメムシ類の園内への侵入を防ぐため, 被害軽減に有効である。

夏ネギ

1. ネギハモグリバエ

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|------|-----|------|
| — | 多い | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、被害度※（本年値 15.6，平年値 4.5），発生地点率（本年値 100%，平年値 68%）ともに平年より高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後は気温の上昇に伴って増殖が速くなるので，発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 薬剤散布は，必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また，収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため，IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 県内でネギハモグリバエの別系統が確認されている（次ページ防除所レポート参照）。この別系統の薬剤感受性は不明であるため，防除実施後は効果を確認する。

2. ネギアザミウマ

[予報内容]

| 発生時期 | 発生量 | 発生地域 |
|------|------|------|
| — | やや多い | 県下全域 |

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，被害度※（本年値 28.9，平年値 25.9）は平年並～やや高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる

- ② 気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想される

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後は気温の上昇に伴って増殖が速くなるので，発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 雑草にも寄生するため，圃場周辺の除草を徹底する。
- ③ 薬剤散布は，必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また，収穫前日数に十分注意する。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため，IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

ネギハモグリバエの別系統の発生について

<発生経緯>

平成 30 年 10 月に、ハモグリバエ類により秋冬ネギの葉組織が食い尽くされて白化する被害が県内ネギ圃場において発生しました。県農業総合センター園芸研究所が被害株から得られた羽化個体について、検鏡および（国研）農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター所蔵の塩基配列データ（上杉・徳丸，2019 応動昆大会）を用いて塩基配列の比較検討を行った結果、従来の塩基配列（以下、A 系統と略記）とは異なる塩基配列を持つネギハモグリバエとして同定されました（以下、B 系統と略記）。B 系統は、平成 28 年頃より京都府で、平成 29 年頃より富山県で発生が確認されています。

<特徴>

ネギハモグリバエ A 系統と今回新たに発生が確認された B 系統とは、形態による識別は困難です。

B 系統は、一葉あたりに複数頭の幼虫が葉の内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害することが特徴で、A 系統と比較して、1 葉あたりの幼虫数が多い傾向があります。B 系統の初期の食害痕は、従来の A 系統と同様で、不規則な白線状ですが、進展すると近接した食害痕同士がくっついて、葉全体に及び、葉が白化したようになります（写真 1）。さらに進展すると、葉肉が食い尽くされて、表皮が浮いた状態になり、表皮を剥離すると、多数の幼虫が確認されます（写真 2）。

<防除対策>

- (1) 発生を認めたら、ネギハモグリバエに適用のある薬剤により、発生初期の防除を徹底する（令和元年 5 月 20 日 病害虫発生予察特殊報第 1 号参照）。
- (2) 被害葉及び収穫残さは本種の発生源となるので、残さは圃場内に放置せず、一カ所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。



写真 1 食害痕により、白化したネギ葉

写真 2 表皮を剥離した時の被害部の様子
(矢印は幼虫を示す)

【その他の病害虫】

| 作物 | 病害虫名 | 発生予測 | 発生概況及び注意すべき事項 |
|---------|----------|-------------------|--|
| 水稲 | イネドロオイムシ | 発生量：平年並 ～やや少ない | 5月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。曇雨天が続くと発生が助長されるので注意する。幼虫の発生が多く，食害が目立つ場合は防除を行う。 |
| | イネミズゾウムシ | 発生量：やや少ない | 5月下旬現在，やや少ない発生である。 |
| ナシ | ハダニ類 | 発生量：やや多い | 5月下旬現在，県内一部圃場で発生を確認している。 |
| | アブラムシ類 | 発生量：平年並 | 気温の上昇に伴い発生が助長されるので注意する。 |
| ブドウ | 灰色かび病 | 発生量：平年並 | 5月下旬現在，平年並の発生である。 |
| | べと病 | | |
| 半促成ピーマン | 斑点病 | 発生量：平年並 ～やや多い | 5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。 |
| | うどんこ病 | 発生量：やや少ない | 5月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。 |
| | ハダニ類 | 発生量：平年並 ～やや多い | 5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。 |
| | アザミウマ類 | 発生量：平年並 ～やや少ない | 5月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。 |
| 夏ネギ | 黒斑病 | 発生量：平年並 | 5月下旬現在，平年並の発生である。 |
| | べと病 | | |
| | さび病 | 発生量：やや少ない | 5月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。 |

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 6月1日から6月30日)

気象庁(5月30日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

| [確率] | 要素 | 予報対象地域 | 低い(少ない) | 平年並 | 高い(多い) |
|------|------|--------|---------|-----|--------|
| | 気温 | 関東甲信全域 | 10 | 20 | 70 |
| | 降水量 | 関東甲信全域 | 40 | 40 | 20 |
| | 日照時間 | 関東甲信全域 | 20 | 40 | 40 |

[概要]

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

<1週目の予報> 6月1日(土曜日)から6月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率70%

<2週目の予報> 6月8日(土曜日)から6月14日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

<3週目から4週目の予報> 6月15日(土曜日)から6月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成31年4月25日発表)の防除所レポート参照
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。